

## 参 考 資 料

○ 略年表

○ 人物略歴

○ 講演リスト

○略年表（第四集関係）

西暦	和暦	事 項
1542	天文11	鶴子銀山（沢根）発見され稼業始まる。
1589	天正17	佐渡国人滅び、上杉領となる。
1594	文祿3	秀吉、伏見城築城。
1596	慶長元	沢根町たちはじまる。相川町たちはじまる（上相川岩崎に金銀山）。
1598	3	上杉景勝、会津移封。秀吉没。
1600	5	敦賀の豪商田中清六、代官（～慶長8）として来国。
1601	6	相川金銀山繁栄、他国から大量の人流れこむ。上杉景勝、米沢移封。家康、佐渡金銀山を直轄。
1602	7	運上金百貫匁、運上銀一万貫匁にのぼる。
1603	8	江戸幕府開く。大久保長安、佐渡の代官（～慶長18）となり、目代として石見から大久保山城、宗岡佐渡など来国。
1604	9	長安入国。鶴子より相川の新陣屋（奉行）に移る。石見から吉岡出雲らが加わる。
1608	13	13年から14年にかけて長安に招かれた大工水田与左衛門、富田助右衛門の手により小比叡蓮華峰寺弘法堂、四日町大願寺など社寺建築盛んに行われる。
1611	16	他国から杉木皮夥しく積込まれる。佐渡の山林伐採禁止、銀山入用の留木、炭、薪など出羽庄内など近国から入る。
1613	18	長安、駿府に没す。宗岡佐渡、佐渡に没す。
1614	19	小木港、出雲崎への金銀の渡海場に定まり繁栄。
1624	元和9	長安が計画した三国街道開通。
1629	寛永6	（佐渡）中山街道開通。翌年相川の町並み（一丁目～五丁目）完成。
1637	14	島原の乱関連、キリシタン数十名を中山で処刑。大瀧新田開発着手。
1655	明暦元	高田藩の清水街道開通計画。
1667	寛文7	上記計画断念。
1672	12	河村瑞賢、西廻り航路改良、小木港が佐渡の寄港地となる。
1679	延宝7	越後（高田）騒動。
1681	天和元	小倉実起父子、佐渡へ流される。
1738	元文3	この頃から長崎俵物（干鮑、イリコなど）はじまる。
1778	安永7	相川金銀山の水替人足はじまる。
1823	文政6	「広恵倉」、相川（羽田浜）に設置。
1825	文政8	佐渡奉行所構内に「修教館」建設。
1837	天保8	『北越雪譜』（鈴木牧之）、江戸で刊行される。

西暦	和暦	事 項
1838	天保 9	佐渡一国一揆。
1840	1 1	川路聖謨入国、一揆騒動の後始末にあたる。「広恵倉」活動停止。
1868	明治 元	奥平謙輔入国。佐渡県となる。新潟港開港。
1870	3	相川鉦山に洋式精錬炉建設。
1871	4	元地役人二百数十名帰農。廃藩置県により新潟・柏崎・相川の3県。
1873	明治 6	新潟・柏崎県合併し、新潟県となる。
1876	明治 9	相川県、新潟県に合併、相川支庁となる。夷～新潟間に北越丸就航。
1879	1 2	佐渡は雑太（さわた）・羽茂・加茂の三郡制となる。
1880	1 3	国会期成同盟第二回大会に佐渡代表として鶴飼郁次郎参加。
1883	1 6	有田眞平不敬事件。北一輝生れる。
1885	1 8	若林玄益ら「越佐汽船会社」設立、のち新潟側に主導権が移る。
1888	2 1	佐渡鉦山、宮内省御料局管理となる。
1890	2 3	夷、相川で米騒動。
1892	2 5	円山溟北没。
1896	2 9	三郡制を廃止、佐渡郡となる。佐渡鉦山、三菱合資会社へ払下げ。 佐渡中学設立許可（初代校長、大島多計比古）。
1897	3 0	北一輝、佐渡中学入学。「佐渡新聞」（相川）創刊される。
1898	3 1	八田三喜、第2代佐渡中学校長となる。
1900	3 3	北一輝、退学。
1901	3 4	八田三喜、府立三中へ転任。一輝、『明星』へ投稿、二首採用。
1902	3 5	本荘了寛の明治記念堂・開導館（金井町）落成。
1904	3 7	日露戦争。
1905	3 8	北一輝、「佐渡中学生諸君に与ふ」を配布。
1906	3 9	北一輝、『国体純正社会主義』刊行（発禁）。
1909	4 2	夷～新潟間に第十五度津丸（99トン）就航。相川～夷間に乗合自動車往復。
1918	大正 7	沢根町で米騒動。
1919	8	佐渡汽船、佐渡銀行破綻。
1923	1 2	中山トンネル開通。
1932	昭和 7	汽船会社3社、半官半民の佐渡汽船(株)を設立。
1937	1 2	北一輝、処刑される。
1945	2 0	有田八郎、戦争終結の上奏文を奉る。
1946	2 1	本間雅晴将軍、マニラで処刑される。

『佐渡の歴史』（郷土出版社）、『天領佐渡』（田中圭一著、刀水書房）等から作成。

## ○人物略歴

- ・青野季吉（明治23～昭和36／1890～1961）

沢根生まれ。文芸評論家。読売新聞等を経て、「種蒔く人」「文芸戦線」同人。プロレタリア文芸理論の指導者となる。昭和三年、人民戦線事件に連座、入獄後、転向。戦後はヒューマニストとして文芸評論活動。文芸家協会会長も勤めた。昭和三十五年郷里に「ペンの碑」が建てられた。

- ・安藤昌益（元禄14～？／1701～？）

秋田藩生まれ。江戸中期の社会思想家、医者。『自然真営道』を著し、封建制度を批判した。その生涯は不明な点が多い。封建政治の重圧と天災・飢饉にあえぐ農民の悲惨な生活を直視し、封建社会を痛烈に批判。封建家臣団を縮小してこれらを帰農させ、また労働を嫌う怠け者は労働意欲を持つまで拘禁し、商人もまた生産的労働につかせるべきである、などと主張する。

- ・大島高任（文政9～明治34／1826～1901）

南部藩士。盛岡生まれ。江戸末期から明治初期の鋳業技術者で日本の近代製鉄技術の父と呼ばれる。20歳のとき長崎留学、蘭学を修め、ヨーロッパの採鋳、冶金技術などを学び大砲鑄造や鋳山開発を志す。嘉永6年（1853）水戸藩の要請により、反射炉で鑄砲製造に成功。これに要する大量の鉄鉄確保のため南部藩の釜石鉄山を開発。安政4年（1857）12月1日、釜石市に我国最初の洋式高炉を建設、出鉄を行い近代製鉄技術の道を拓いた。相川鋳山に高任坑がある。

- ・小倉実起（元和9～貞享元年／1623～1684）

天和元年（1681）、実起が外孫靈元天皇第一子の出家に反対して解官、この子公連、季伴とともに佐渡に流され小倉家は中絶。のち帰洛した季伴に家名相続が許されて再興。維新後子爵。

実起は、伊藤仁斎とならぶ碩学の米川操軒などとも交遊があり、熊沢蕃山に琵琶を教授したといわれる。在島2年余り、長男公連とともに亡骸は鹿伏（相川町）の観音寺に葬られ、板碑形の墓がある。実起は島内に京風の庭造り、公連は主として連歌を広め、佐渡の歌道が一層盛んになったとされる。

- ・河村瑞賢（元和3年～元禄12／1617～1699）

伊勢（三重）出身。明暦3年（1657）、江戸大火に際して木曾の材木を買占め、一大富豪となる。のち、幕命をうけ東北の物資を迅速に大坂、江戸に運ぶための奥州航路、いわゆる東回り航路と西回航路を開拓。また安治川、淀川、長柄川、中津川などの治水事業を行なった。延宝2年（1674）、高田藩に招かれ中江用水建設、郷津湾築港、銀山開発などを行なった。

- ・北 一輝（明治16～昭和12年／1883～1937）

佐渡湊町生まれ。明治35年（1905）上京、『国体論及び純正社会主義』を発表、幸徳秋水らと交わる。辛亥革命が始まると上海に渡るが革命に絶望。反革命の立場を明確にして大正8年（1919）、『日本改造法案大綱』執筆、国家主義運動の教典となる。二・二六事件の黒幕として昭和12年刑死。

- ・北 吟吉（明治18年～昭和36年／1885～1961）  
 明治18年湊町（両津市）生れる。明治41年早大卒。欧米に学び大東文化学院、大正大学教授となる。昭和11年以降、衆議院議員当選8回。戦後、自由党結成に尽力、政調会長を務めた。
- ・小林虎三郎（文政10年～明治10年／1827～1877）  
 長岡藩士の子。藩の儒者と父に学問を学び、若くして藩校崇徳館の助教授となる。開国論を唱えた。戊辰戦争には河井継之助と意見を異にし非戦論を唱え、戦後長岡藩大参事となり殖産興業、興学に尽力。「米百俵」で知られる。
- ・佐藤一斎（安永元年～安政6年／1772～1859）  
 林述斎の門人。安政3年（1800）平戸の維新館で講義、文化2年（1805）林家塾の塾長となる。天保3年（1841）昌平黌儒官に登用されると共に、幕政に外交・時務に進言するところが多かった。学説は朱子学一辺倒でなく陽明学の影響も受けた。著書は『言志四録』など。
- ・竹越与三郎（慶応元年～昭和25／1865～1950）  
 中頸城郡柿崎町生まれ。旧姓浦野竹越家の養子。著述家、政治家。西園寺公望に認められ雑誌『世界の日本』を発行。
- ・太宰春台（延宝8年～延享4年／1680～1747）  
 江戸中期の儒者。信州飯田の生まれ。32歳のとき荻生徂來に入門、古文辞学を奉じた。学は礼義を重んじ、経世を中心としたが、同門の人々と異なり詩よりも徳行を重んじた。著書に経学の『聖問答』、経世論に『経済録』などがある。
- ・本荘了寛（弘化4年～大正9年／1847～1920）  
 本屋敷村（金井町千種）得勝寺住職。明治20年、北溟社を興し佐渡最初の定期刊行物『北溟雑誌』を創刊、六十八号で廃刊。日清・日露戦争が始まると出征兵士の留守宅や戦没者遺族慰問を行った。彼は、佐渡に靖国神社と遊就館の建設を実現するため島内はもとより全国各地を乞食行脚して浄財を募り、金井町に明治35年（1902）明治記念堂と開導館（博物館）が落成した。
- ・本間雅晴（明治20年～昭和21年／1887～1946）  
 大正・昭和期の軍人。陸軍中將。昭和13年（1938）参謀本部第二部長。台湾軍司令官となり、太平洋戦争では第十四軍司令官としてフィリピン作戦を指揮。敗戦後、バターンの「死の行進」の責任者としてマニラで刑死。

〔参考資料〕

『日本史広辞典』（山川出版社）、『佐渡の歴史』（郷土出版社）、『新潟県人』（新人物往来社）等。